

優秀賞

いわたくんちのおばあちゃん

荒川区立第二峡田小学校四年

小島 花梨

「八月六日ちづこさんは、一人になりました」
ここが一番心にのこっています。わたしのひいお
ばあちゃんの体験といっしょだからです。

わたしは、戦争があった年のずっとずっとあと
に生まれて戦争のことが、知りません。なのでこ
の本を読んで戦争のことを知りたいと思いました。
わたしは、ひいおばあちゃんがなくなる時に生
まれたので、戦争の事を聞けませんでした。でも、

このことをおばあちゃんが教えてくれました。

わたしのおばあちゃんは、戦争の時まだ生まれ
ていませんでした。でもおばあちゃんは知ってい

るかぎりのことを、教えてくれました。ひいおば
あちゃんは、お父さんお母さん妹の三人をなくし
たそうです。しかしお兄ちゃんと弟がまだ生きて
いたので一人ではなかったと聞きました。

お父さんとお母さんと妹がなくなった理由が気
になったので、おばあちゃんに聞くと、そこは、
おばあちゃんも分からないと言っていました。き
っとにげおくれたのではないかと考えました。

助かった弟は、お母さんといっしょににげてい
たけれどお母さんだけにげきせず、弟はぐうぜん
にも橋の下にいて、そこでみつかったと聞きました。
た。

この本のあとがきに、いわたくんのお母さんの
気持ちを書いてありました。そこには戦争がむか
しの話しと思わないでねとあり、わたしは戦争の

ことを知り、戦争は家族をばらばらにしてしまうのだと分かりました。わたしは自分の家族とはなれるのは、ぜったいにいやです。みんなの幸せをうばう戦はぜったいしてはいけないことだと思えます。わたしはこれからみんなの気持ちを考えてこうどうしていききたいです。

〓柳田邦男先生からのメッセージ〓

今の子どもたちは、戦争のこわさを知らないのは、当然のことです。日本が戦争をして、全国のいたるところが空襲を受けて、たくさんの人たちが死んでいった時代から、もう七十年以上もたっているのですから、今の小学生のお父さんやお母さんですら、戦争が終わって三十年以上たち、平和な世の中になってから生まれているのです。

では、戦争を知らない人たちは、なぜ戦争のことを学ぶ必要があるのでしょうか。それは、戦争が始まってしまうと、大きな都市も小さな町も、爆撃によって一瞬にして破壊され大火災になって、何万人、何十万人という人々が焼かれてしまうという想像できないほど恐ろしいことが起こるからです。戦争はゲームで遊ぶのとは、まったく違います。その恐ろしさを知らないと、どこかの国を敵にして、安易に「やっつける！」などという感情を持ってしまうおそれがあります。

小島さんは、ひいおばあちゃんが、戦争の恐ろしさを体験したのですね。ひいおばあちゃんは、空襲で街が焼かれたとき、まだ子どもだったのでしょう。ひいおばあちゃんがその子であるおばあちゃんに話したことによると、ひいおばあちゃん

は、炎上する街のなかで、お父さんとお母さんと妹が亡くなり、自分とお兄ちゃんと弟の子ども三人だけが生き残ったのですね。弟はお母さんと逃げたけれど、お母さんは火に巻かれ、弟だけがはぐれて橋の下に逃れて助かったとのこと。何と恐ろしく悲惨なことでしょう。

小島さんは、そういう戦争の恐ろしさを、おばあちゃんから聞いていたのですね。だから絵本『いわたくんちのおばあちゃん』に強い関心を抱いて読んだんですね。

この絵本のおばあちゃんは、「ちづこさん」と言います。小島さんがこの絵本の「八月六日ちづこさんは、一人になりました」という文章が一番心にのこっていると書いているのは、自分のおばあちゃんから聞いていたひいおばあちゃんの恐ろし

い空襲体験 ― 両親と妹の命が爆撃で奪われ、子ども三人だけが生き残ったという体験のことが、同じだと感じたからです。

自分の家族の、もうずっと前に亡くなっているひいおばあちゃんの体験のことだけでは、「そんなことがあったのか」といった昔話のような受け止め方で終わってしまいがちです。しかし、同じような体験をした人の話を、物語として情景が目の前に浮かんでくるような本で知ると、たとえひいおばあちゃんの時代の体験であっても、けっして昔話ではなく、最近あったことのような現実感をもって感じるようになるものです。

絵本の「八月六日」とは、広島に原子爆弾が投下され、一瞬のうちに広島街が炎上し、二十万人の命が奪われた日のことです。「いわたくんちの

おばあちゃん」は、そのなかで自分一人だけが生き残り、あとの家族は全員亡くなった物語なのです。

小島さんが、「戦争は家族をばらばらにしてしまうのだと分かりました」「みんなの幸せをうばう戦争はぜったいしてはいけない」と書いていること、その思いを忘れないでください。私は小学三年生のときに空襲の恐ろしさを体験していますので、今の戦争を知らない世代であっても、小島さんのようにしっかりとした考えを持つことの大切さを、多くの子どもたちに共有してほしいと思います。